

異彩ある個性

坂本繁二郎君の藝術

坂本繁二郎

全體自分は色々な種類の繪に興味と同情を持ち得る故、自分に好きな繪を見せて呉れる畫家は随分澤山ある。茲に坂本君の藝術について一寸した考へを述べても、それは、好きな畫家中にも殊に自分に取つて、拔群に見えるといふ譯ではない。唯好きな畫家の一人であるからだ。尤も、特に自分をして同君を選ぶやうにさせたのは、そこに何等か、同君の藝術中自分を惹くものがあるかも知れん。實は坂本君もまだ完成の人ではなく、

今、評論するのは時機が尙早かも知れない。自分の知る所に依れば、未だ同氏は、眞に其聲價を定めるだけの作品を公けにしてはゐない。けれども同君の藝術中に發展して行く特殊の素質は充分に見ることが出来る。自分の此つまらぬ文は、恠ういふ素質を材料として一般の繪畫に對する研究的思索の報告である。

藝術家の決勝點は一所であるが、其處に到る道は一人に唯一筋だけであると思ふ。然るに或る多數の連中は一團となつて同じ道を進み、又或連中は有力なる先導者の跡を追ふて同じ道を進む。一團となつて進む連中が決勝點に入つた時には、其勳功は集合體全部の功となるから、其榮譽の前

は當然僅少のものとなる。後の連中の決勝點に着いた時には、其功績は先導者に獨占せらるゝから、追従者は失望に終るの他ない。

坂本繁二郎君は確かに自己の道を歩いてゐる人である。勿論道の半ばにあるには違ひないだらうが、其道は同君獨創の道であつて、而かも又興味ある道であることは疑ひないと思ふ。

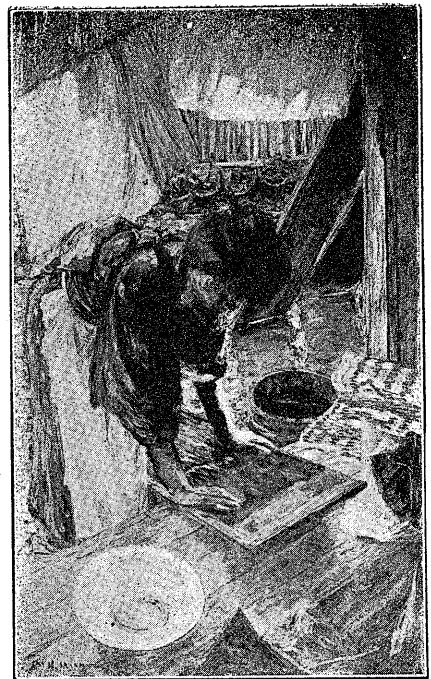
繪畫は人格である。題材の撰擇にせよ、構圖にせよ、色彩手法にせよ、凡そ繪畫を構成する總ての要素中に作者其人が反映してゐる。支那の論畫



坂本繁二郎氏影

家も「伸毫構景無非拈出自家面目」と謂ひ、西洋の畫人も同様のことを言つたのは、甚だ我意を得たものである。此人格が即ち繪畫の内容であつて、其内容の性質が、作者の藝術家的價值を定めるものである。繪を味はふといふことは結局作者の人格を味はふことになる。自分は屢繪を鑑賞しながら、其作者を想像する。自己を偽つた繪は初めから問題にならない。そんな物は何處かに虚脱な處、矛盾した處があるの

で直覺で判る。坂本君の繪が同氏の自己から生れてゐるのは明かであるが、從來、自分が同氏の作



張 物 (作年三十四) 同 上 筆

を通して幻の様に描いてゐた坂本君の輪廓を現實の坂本君に會つて明確にしたいといふ好奇心と、且つは同君の舊作やら何やらを、一層廣く觀たいといふ希望で、或る雨の日、雜司ヶ谷の寓居を訪れた。

坂本君とは是迄處々で會つて居り、又双方の友人柳敬助君などからチョイ／＼人爲りを聞いたこともあるが、恠うして友人らしく話しをする様な機會は此日が始めてであつた。それで大分自分の想像を確かめることが出来た。

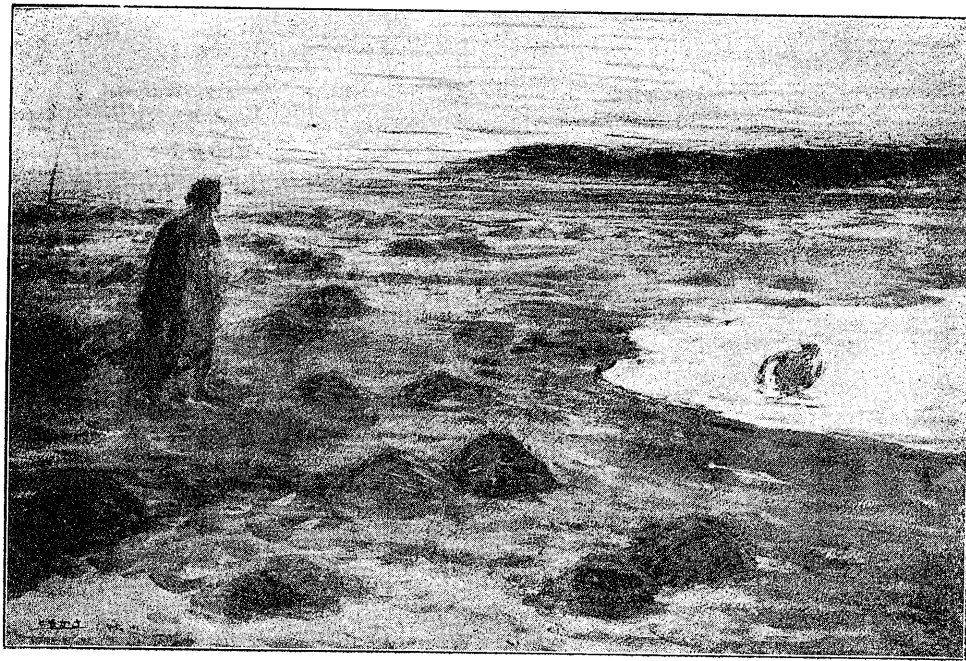
茲に坂本君の人物を充分に描寫する文才のないのは大に残念だが、略言すれば、同君は、風采言動共に質實で、性情は華美な快活なといふ様子は見受けられない。何れかと言へば稍沈鬱で神秘の趣がある。親しみ易い温情を藏してはゐるが、表面の態度は枯淡である。奇矯な變物ではなく、極く常識的な人であるが、其裏に多くの禪味がある。坂本君は恠ういふ人である。少くとも恠う感じ得らるゝ人である。そして、此感じが同君の作の總て

に著るしい感じである。それは淡白水の如き情味であるが、親しむものには泌々と味はとせる。

世の現象を若し日向と陰とに大別したなら、坂本君は其陰に多くの感興を得る人である。絢爛なものよりは質實なもの、アリストクラチックのものよりデモクラチックなもの、快活なものより神秘的なもの、陽気なものより沈鬱なもの、乾燥せるものより濕潤なものに興味を持つ。南の人ではない、北の人である。他の畫家が、若い女の妖艶な美しさ。多彩的な街路の情趣、温い陽光に浴した花園、晴れくした好意的な山水を賛美するやうに、同君は見穿らしい裏長屋の檐先きに、雪の下を植えて釣り下げた鮑貝に憐れを感じ、腐つた板塀の裾に放り出された蝶螺殻に同情する。其他、

同君の作に現はるゝ自然人生は、荒涼な灰色の沙丘に牛の悄然と立つて居る處とか、黄昏の神秘に包まれた廣い沙濱に、一人二人の蜚女のさまよふ光景とか、場末の空地に

濱 (大正元年)



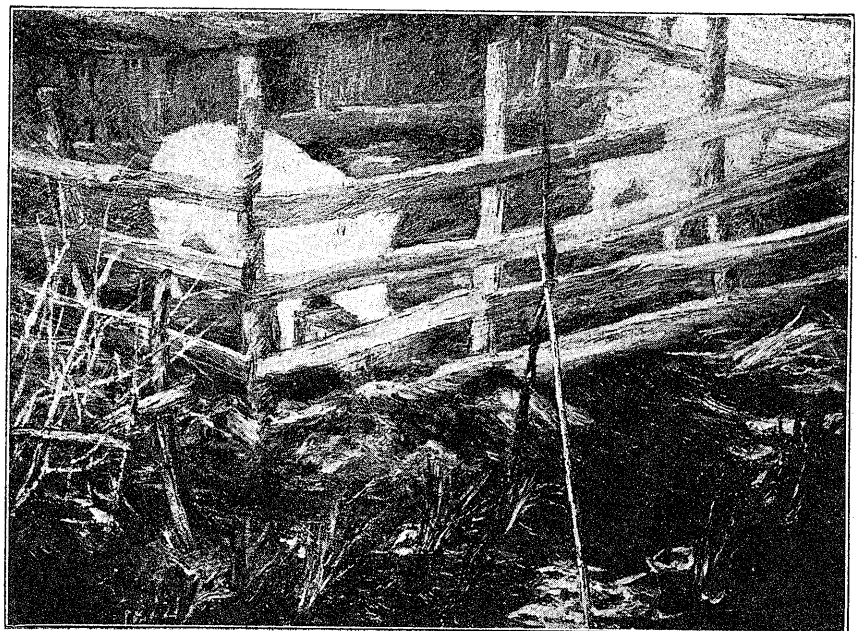
同筆

塵紙の漉いて乾してある處とか、陰鬱な脂色の小農家を中心にしたり、或ひは、畑のものや、色々の灌木の鬱陶しく茂り合つた山家の裏庭に、土管の煙突の付いた、何か知らんの堀つ立て小屋などを背景として、何處にどんな賑やかな世間があるかも知らぬげに兀々と仕事してる、重くるしい農民生活などいつた種類のものである。そして何の繪の感じも、大體に於て、荒涼で、孤獨の哀感といふやうなものがあり、そして又、一寸皮肉な處もある。

坂本君は決して冷灰枯木の如く、人間離れのした人ではない。裏に温たかき情を包んでる。否寧ろ、表面の靜的な奥底には餘程情熱的な分子もあるやうに見受けられる。其爲めか、生きた物に多くの興味を持つさうである。同君の繪は、自然が主になつて居る場合でも、大抵、人間か動物が書き入れられる。又全く生物を描かぬ場合でも、其感情には、其

近く人間の存在を暗示するかの如きものが多い。それで、同君の撰ぶ自然の荒涼の感は、生物に對する人の同情と結合して、特に其哀愁の情調を強めることになる。

此等の感情は即ち坂本君其人であつて、何ういふ繪を描いても、此坂本君がそれへ出てくる。例へば、坂本君の書く田舎の人生と、南君の書く同じ生活とを比較して見る。南君の書く境地は暢氣で、暖かみがある。然るに、坂本君の一方は沈鬱で、悲惨である。前者を子守唄とすれば、後者は



豚 (大正二年六月太平洋畫會展覽會出品) 同筆

悲劇である。南君が春の

御庭村の一部(四十五年)

同筆

然、境地在、既にさういう感

昨年文展に出た『うすれ日』といふ作がある。

日なら坂本君は冬の日で
ある。尤も南君の繪にも、
人生の果敢ない、人間の
弱いといつた様な、微か
な哀愁の情はあるけれど
も、其他面に於ては、自
然の公平な慈悲は邊陲の
賤しい生活に迄、其恵を
與へるといふやうな、
平和な樂天的氣分があ
る。之に反して坂本君の
繪では、其自然も森嚴で、
少しも恩惠的な處がない
にも係はらず、其内に棲
息する自然の勞働者は質
朴な頑固と、無智の安心
とを持つて無頓着な様子
は、却つて悲壯の感がある。今、文展に出てをる



情を持つてゐるものであると
は、撰まれた題材を視ても判
るが、そんな題材に牽引され、
それを畫材に選擇したのは坂
本君の主觀であるのみなら
ず、繪畫の感情は、單に題材
のみに固有のものでない、其
扱ひ方、即ち構圖の模様、色
彩の感じ方、手法に現はれた
作者の性情などの總和であ
る。

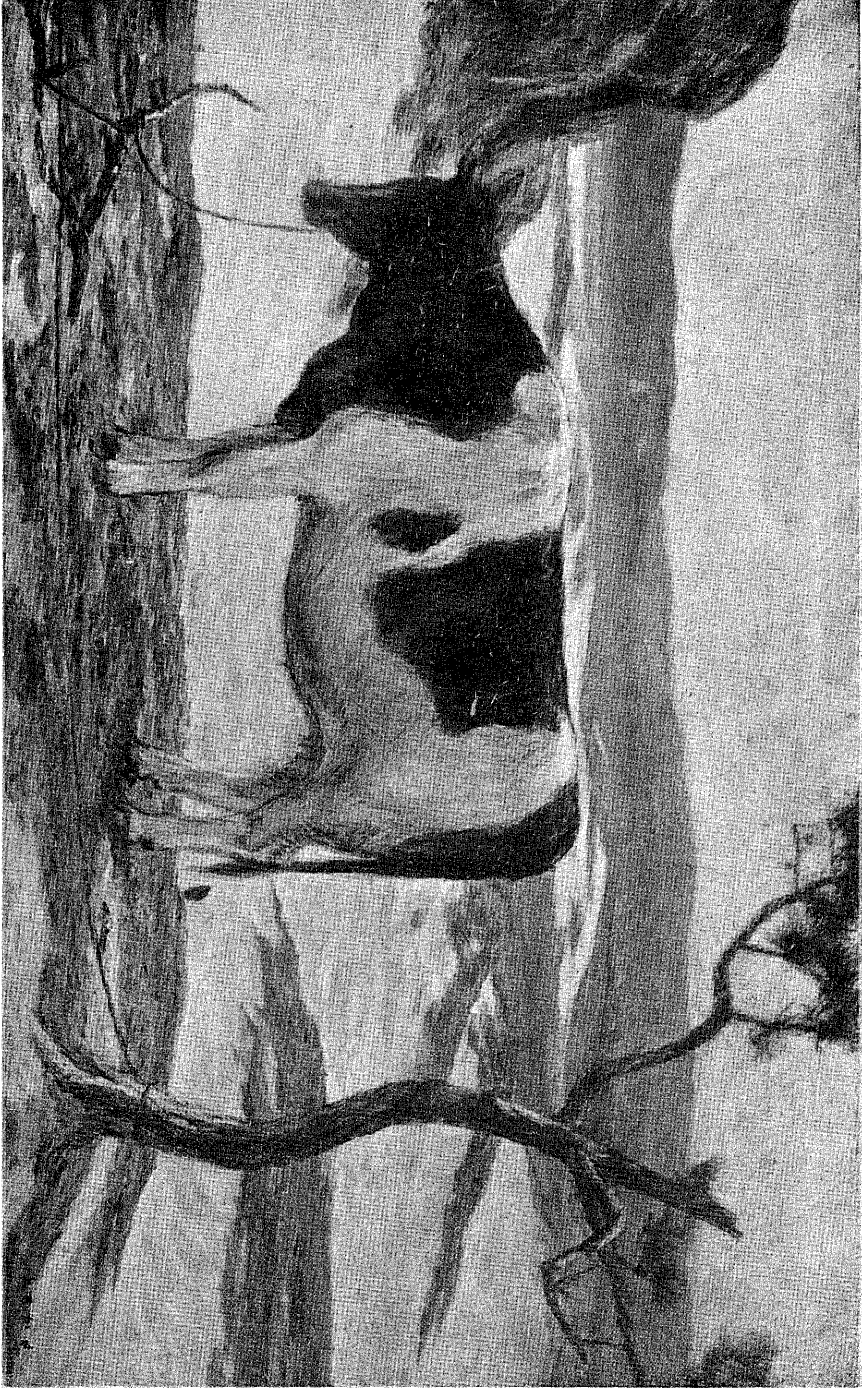
元來、構圖は畫面の統一を
得る爲めのもの、言ひ換へれ
ば、感情の統一を得る爲めの
ものであるから、構圖に依つ
ても様々な感情を興ふること
が出来る。例へばベックリン
の『死の島』の構圖は森嚴に、プッサンの『アカデイ
の牧羊者』のは莊重に、又タアナアの海景は雄大
に、シャヴンヌの作の多くが、靜寂に感ぜらるゝ
が如きである。坂本君の構圖は、時に統一の點に
於て、多少の疵瑕の有ることもあるが、それは陳
套の構圖を破つて、自己の感情に適する、特殊の
構圖を作らうといふ企てから來てゐる。其形式は
素朴で、間の抜けた様な、又一寸皮肉な點もある
構圖であるが、其傳へる心持ちは、寂寞な、孤獨
な哀調があつて、よく題材の情調を助けてゐる。



立 話 (大正元年) 同筆

『魚を持つて來て呉れた海女』といふ繪を見よ。無
智な然し朴訥な、男の様な海女の容貌、態度。そ
れを包む水つばい空氣、背後の松に透けた薄黃の
冷光、足下に置かれた色々な附屬物、其周圍に生
えた龍の髯のやうな草などが一致して、現はすも
のは、派手な色彩など滅多に見られぬ、邊鄙の漁
村の蕭條たる情趣である。荒涼寂寞の感である。
一寸茲で、坂本君の繪に共通な此荒涼の感じは
何處から起るかを考へて見る。勿論、畫かれた自

の『死の島』の構圖は森嚴に、プッサンの『アカデイ
の牧羊者』のは莊重に、又タアナアの海景は雄大
に、シャヴンヌの作の多くが、靜寂に感ぜらるゝ
が如きである。坂本君の構圖は、時に統一の點に
於て、多少の疵瑕の有ることもあるが、それは陳
套の構圖を破つて、自己の感情に適する、特殊の
構圖を作らうといふ企てから來てゐる。其形式は
素朴で、間の抜けた様な、又一寸皮肉な點もある
構圖であるが、其傳へる心持ちは、寂寞な、孤獨
な哀調があつて、よく題材の情調を助けてゐる。



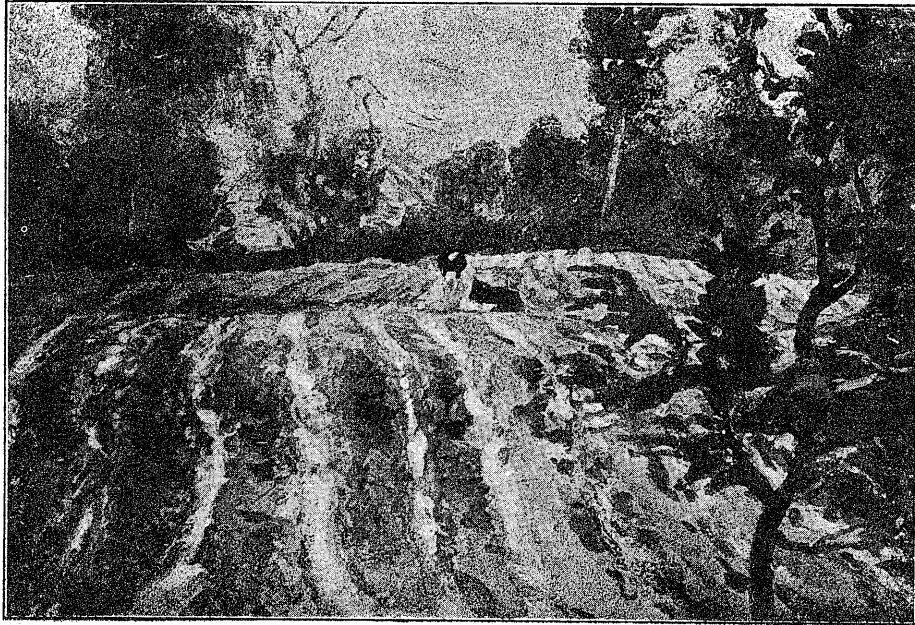
筆 郎 二 繁 本 坂

日 れ 子 5

彩は書かれた題材に固有のものであるけれども、其題材は同君の主観に導かれた題材であるから、それに固有な色彩も亦、同君の性情と共鳴するものであるのは明かである。況んや、色彩の印象は、絶対的のものでなく、各人の感じ方や、又分解の段に幾らも主観の這入る餘地がある。であるから、此色彩も坂本君の主観と見做して差支へ

野良犬 (テンペラ)

同筆



ない。

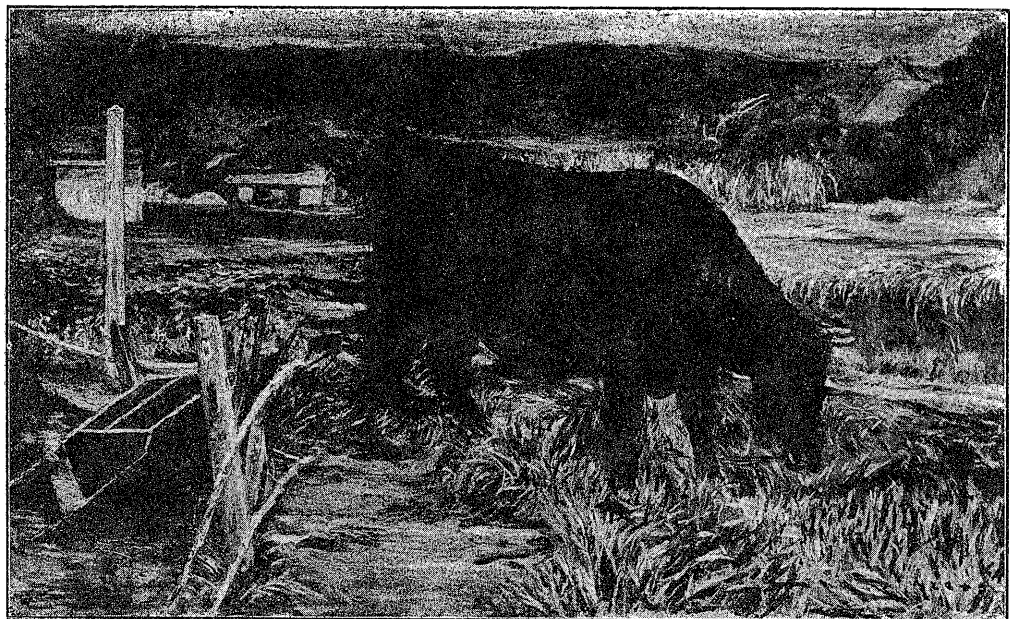
筆技に於ても同君は、自己の主観に委せて、客観現象を無視するといふことはなく、寧ろ對象に忠實であるが、其懷に現はるゝ手法や筆觸の心持ちは、簡朴で地味である。練達はあるけれど、派手な、氣のきいたといふやうな心持はない。坂本君の繪に現はるゝ感情は、斯く、題材ばかりからでなく、構圖、色彩、手法等、總ての諸要素がそれを助けてゐるのである。

若し、坂本君が、無意味に、行き當りばつたりに題材を撰むとしたならば、其作の總てに斯く共通な特色のある譯もなし、又、必ずしも、繪の諸要素に現はれた坂本君の感情と、題材の感情とシックリ適合すること許りはあるまい。無論、坂本君は、題材の撰擇でも、構圖でも、色彩でも、皆本眞の自己に教導されてゐるので、一面から言へば、同君は自己の感情を發表する爲めに、自然を使役し、構圖を使役し、色彩を使役するのである。故に其繪の感情は、全く坂本君自身の感情である。そして、同君に、特有な異彩ある個性である。畫家には夢がなければいけぬ、詩がなければいけぬといふ。その夢といひ、詩といふのは、即ち作家に特殊の、他人と異つた個性のことを言ふのだと自分は思ふ。

よく人は又、畫家は、自己に忠實なれといふ。自然を變化の材料として、其上に自己に忠實であるといふことは、勿論佳いことで、是非、畫家は、さうなければならぬものであるが、唯、自己に忠

赤牛 (大正元年)

同筆



實でありさへすれば、それで立派な藝術が出来るかといふと、さうはいかない。純粹の製作動機は唯、畫家が己れを満足させることにあるのは言ふ迄もないが、其作品を公けにする以上、世間に其價値を問ふ以上は、自己以外の人の審美的欲望をも満足させるべく要求されても仕方がない。畫家



が全く藝術家的性質を持つて居る時は、自己を満足させると同時に、人をも満足させ得る。併し、畫家の人格が、非藝術家的であつたり、平凡だつたりした場合には、畫家自身は製作によつて、自己を満足させても、人を満足させることはない。例へば、物質的な人があつて、工業的技巧を以て、物を如實に描いたとする。それでも、其人は自己に忠實であつたのだ。けれども他人の賞翫に對しては全く無價値である。我々は其繪から何等の藝術的快樂を享けない。如何に自己に忠實な繪でも、其自己が平凡な自己であつては、何の價値も無い。藝術に平凡は禁物である。勿論、自己を偽つた異風、或ひは、單に好奇心を満足させる様な異風は藝術にはならないが、畫家は感情の上に立脚して、異彩ある自己を養成することは最も必要だ。これは畫家の素質にも因らうし又修養にも因らうが、觀賞者にとつてはそれは何づれでもいゝ、唯異彩ある個性を尊敬すればいゝ。我が自然に對するに、知識を以つてする場合と感情を以つてする場合とある。知識を以つてした場

合には、自然の價値は普遍的である。甲乙人によつて差別はない。他人が金盃と見たものを茶碗と間違へる人はない。併し恣んな觀察は、少しも觀察者其人の出る餘地がなく、平凡な、乾燥無味なものである。鑑賞の對象にならない。人が己れの感情を以つて、自然を撰擇し、排列し、描寫した時に、始めて藝術となる。感情は元、個人的なもので、同一物に對しても、人によつて、異つた調子があるから、少くとも鑑賞の對象になる。然し、此感情にも、又多くの人に共通な、従つて、平凡な感情がある。例へば、名所繪圖のやうな風景畫でも、果物屋の看板のやうな靜物畫でも、感情によつて排列され、色どられてあれば低級の藝術である。が、それらの感じは安價な感情である。其觀察は素人にも出来る觀察で、多數な俗衆の審美慾を満足させるには足りるが、高等の藝術とは云へない。最も進んだ文明を標準とした藝術ではない。藝術家は須らく、今迄の

坂本龍二 郎

自 署

人の知らぬ、少くとも他の多くの仲間と異つた味を提供するものでなければ駄目だ。異彩ある藝術でなければ駄目だ。若し、異彩ある藝術で、それが更に、人を壓伏する藝術であれば理想的であるが、そんな藝術は稀れである。

自分が坂本君の繪を好きなのは同君の性情の



或る部分と、自分の性情の或る部分とが互に呼應する處のある爲めかも知れぬ。自分に取つて特別に面白く

感せられるのかも知れぬ。これは勿論有り得べきことで、それだけでも、坂本君の藝術の價値は充分だと思ふが、唯、自分だけの好惡以外に、坂本君の藝術が、他の一般と異なつた、特殊の個性を有することも、自分を牽引する有力な理由であると思ふ。

前にも云つた通り、同君は自己に特殊の道を見出して居るが、勿論、其道に於て、完全に成功したといふには時期が早過ぎる。自分は之から、如何に、坂本君が發展するかを觀て居やう。